**2016年2月18日 詩編を読もう：油を注いだ人々 (詩編105:1-15)**

四旬節に入り、1週間が過ぎた。　今週の詩編を読もうでは、聖書日課では来週の22日から25日に与えられている詩編箇所、105編1-15節をとりあげたい。　各自で読み、また、自分で聞き、いつものように、気になる言葉、あるいはインパクトのあった言葉や節は何かを挙げる。次に、詩編の作者の気持ちになってどのようなことを詠っているか、考える。そして神は、今の私たちに何を語っているのか、思いを巡らせよう。

詩編105編

1:主に感謝をささげて御名を呼べ。諸国の民に御業を示せ。

2:主に向かって歌い、ほめ歌をうたい／驚くべき御業をことごとく歌え。

3:聖なる御名を誇りとせよ。主を求める人よ、心に喜びを抱き

4:主を、主の御力を尋ね求め／常に御顔を求めよ。

5:主の成し遂げられた驚くべき御業と奇跡を／主の口から出る裁きを心に留めよ。

6:主の僕アブラハムの子孫よ／ヤコブの子ら、主に選ばれた人々よ。

7:主はわたしたちの神／主の裁きは全地に及ぶ。

8:主はとこしえに契約を御心に留められる／千代に及ぼすように命じられた御言葉を

9:アブラハムと結ばれた契約／イサクに対する誓いを。

10:主はそれをヤコブに対する掟とし／イスラエルへのとこしえの契約として立て

11:宣言された／「わたしはあなたにカナンの地を／嗣業として継がせよう」と。

12:その地で、彼らはまだ数少なく／寄留の民の小さな群れで

13:国から国へ／ひとつの王国から他の民のもとへと移って行った。

14:主は彼らを虐げることをだれにも許さず／彼らのことを、王たちに戒めて言われた

15:「わたしが油を注いだ人々に触れるな／わたしの預言者たちに災いをもたらすな」と。

インパクトのあった言葉として、15節の「わたしが油を注いだ人々に触れるな／わたしの預言者たちに災いをもたらすな」と。

詩編作者の気持ちを想像しつつ、この詩編が何を詠っているのか、考えたい。1-6節に詠われているのは、賛美のほめ歌を詠え(1-2節)、主に御顔にむかって(3-4説)、主の御業、戒めを思い出すように、アブラハムの子孫よ(5-6節)。7節から13節では、アブラハムに語られた主の約束からはじまって、出エジプトの歴史を思い出すし、偉大なる主の御業を詠っている。14-15節では、主の戒めが詠われている、「わたしが油を注いだ人々に触れてはならず、預言者たちに災いをもたらさないように。」　13節までの過去の御業ではなく、詩編作者が生きた時点での戒めになっている。

さて、この詩編の言葉を通し、主なる神は、今日、私たちに何を語りかけているのだろうか？　上記で15節の言葉をインパクトのあった言葉として挙げたが、「預言者たちに災いをもたらすな」と出てきたとき、それはイスラエルの歴史の多くの預言者たちの言葉に従わなかった、民の罪を覚えないわけにはいかない。　そして、同じ15節の最初の「私が油を注いだ人」との言葉ば、まず救い主イエスのことになってくるのかと思う。　ちなみに、2月21日の聖書日課の福音書で与えられているルカ福音書13章の31節から35節では、イエス自らがエルサレムで十字架刑にかかることが暗示されており、また、過去において、預言者たちが殺されてしまったことが述べられ、やはり民の罪を覚える。　さらに、現代を思うと、はっきりとそれがキリスト者への迫害だと報道されないところで、キリスト者への迫害は常に起こっているのだと思う。　15節では、「私の油を注いだ人々」と複数形が用いられており、キリスト者となった民にも、迫害が続くことが暗示されていて、事実、それは今も起こり続けているのだと感じる。　たまたま今、ニュースでは、トルコで爆弾テロで28人の方々が亡くなったと報道されていたが、その奥底にある思想はなんなのだろうか？　反キリスト、「神が人間となる。神が人間の中に宿る。それくらい、神が創られた民を愛してくださっている。」という思いを否定しようとする人間の罪なのではないだろうか。

安達均